

● 事例 ●

地域をフィールドにした学生の「成長」支援

三田 育雄

(長野大学 地域連携センター長)

長野大学は、美ヶ原高原と菅平高原という二つの観光地を南北にもつ人口一六万人の上田市のほぼ中央にある。前身の本州大学は、昭和四一（一九六六）年に、当時は人口一万六、〇〇〇人の塩田町の議会と町民の熱意と浄財の提供をえて設立された。したがって、本学は「生まれながらにして地域に根ざした」公設民営型の大学である。

建学の理念にあるように、本学は地域と共生する大学として、「地域社会との緊密な結びつき」を通じて「学問理論の生活化」に取り組んできた。地域への窓口として一九九三年には生涯学習センターを設立して、四年前には、これに発展させて「大学の地域貢献」という課題を明確に意識し、地域連携センターを開設するなど、時宜に適

った対応を重ねている。具体的には、学生と教員とが一体となって地域で学び研究をするとともに、その成果や大学がもつ資源を地域に還元することを通して、大学と地域の双方向性の関係づくりをめざしている。

こうした取組の背景には、「地域の教育力」を資源として活かすことが、地方小規模大学にとって、その社会的意義を主張しうる有力な拠り所の一つになってきているという事情が介在している。しかしまた他方で、大学が立地する地域そのものが、バブル崩壊以降、経済的、社会的な地盤沈下に苦悩する中で、大学の有する様々な資源に熱いまなざしを注ぐようになってきているという事情も無視できない。

ところで、長野大学が立地する塩田平とその周辺は、教

育県長野の中でも、とりわけ教育の盛んな土地柄であった。中世には諸国の僧侶達が集い心血を注いで学問に励んだ。信州の学海と呼ばれ、また大正デモクラシー期には農村青年の自己教育運動である。上田自由大学が発祥の地となった。したがって、この地域の学習や教育への関心と期待には並々ならぬものがあり、こうした歴史的な伝統が、地域の大学をつくり育てる動きにつながったと考えることができる。

長野大学の地域活動は、しかし他方で、学生の基礎学力・学習意欲の低下と社会性の欠如という今日的な課題を、いかに解決するかという問いに対する回答の一つでもある。なぜなら、こうした課題は、キャンパス内の正課カリキュラムだけで解決できるものではなく、むしろ「地域の教育力」の支援を積極的に受けることによって、その解決の糸口を見つけることができるからである。

本学の「大学憲章」には「学生が『自己成長を楽しむ』ことができる支援体制の追求」が掲げられているが、学生の「成長」支援に欠かすことのできない貴重な「仕掛け」、それが、ゼミナールやプロジェクト研究、各種の実習やインターンシップなど体験型の地域活動なのである。キャンパス内では経験できないある種の「緊張感」をもつ

て、地域をフィールドにした調査研究や実習演習や職場体験を行い、その成果が地域で相応の評価を受けたと実感した時に、学生は確実に「成長」する。しかし、「地域の教育力」を最大限に引き出すためには、教員の意識改革と地域をフィールドとした教育経験の積み重ねが不可欠である。

長野大学における地域との望ましい関係づくりは、その点からも未だに道半ば、試行錯誤の真只中にある。以下で、本学における三つの具体的な取組みを紹介するが、いずれもいわば発展途上の取組みであるので、忌憚ないご意見をお寄せいただければ幸いである。

東御清翔高校との高大連携事業

—— 社会福祉学部稲木ゼミナールの事例

社会福祉学部では、新たな福祉課題と人々の福祉向上に関する教育研究を通して、学生自らが様々な生活問題を総合的に分析・対処できるための、幅広い視野と専門的知見と人々の支援に必要な技術とを修得し、地域社会の福祉の向上に寄与できる力を身につけることを学位授与の方針としている。

その社会福祉学部に、二〇〇七年度に長野県教育委員会から「学校・地域の連携による子どもたちへの自立支援事



業」への協力依頼があった。自立支援事業の終了後、本学と県立の東御清翔高校との高大連携の動きは「高等学校ハートフル支援事業」に受け継がれた。新たな枠組みの中では、教員だけでなく学生も積極的に高校を訪問し、たとえば、心理教育に関する授業のTA、保健室でのピアカウンセリング、高校生に対する自動車教習所への通学支援、学満足度調査の実施に貢献した。その成果は、卒業論文や社会福祉学部データの研究実践報告などにまとめられた。

このような活動を通して、本学学生は教職員や生徒の信頼を得て、高校内におけるポテンシャルは徐々に高まった。また、高校が多部制・単位制に変革する時期とも重なり、高校に高大連携を推進する機運が高まった。そして、昨年三月には東御清翔高校と本学との高大連携協定に結実した。

二〇一〇年度からは、協定に基づき学生による積極的な交流活動が展開された。大学祭に高校生を招待する活動では、学生が大学祭のチラシを作り高校生

に参加を呼びかけ、当日は研究発表・展示、模擬店会場を案内した。また、推薦入試を控えた受験生に、本学の特色や学生生活を紹介するとともに模擬面接で対策を伝授するという、学生らしい社会貢献のあり方を考えた。

特に注目するべきは、高校の独自科目「コミュニケーション」に対する授業支援である。学校支援の心理学の「専門ゼミナール」に所属する学生が授業案をつくって、六回にわたって連続授業を行った。テーマは「高校生にもわかるストレス講座」で、心理的ストレスに関する予防・教育的なワークショップである。高校一年生全員にエゴグラムなどの心理テストを行い、その結果と学年会の意見をもとに介入する一クラスを選択した。そして、ストレスの理解や対処方法を指導して、ストレス反応やストレス耐性が介入の前後で改善するかを検討した。現在、学年末の学年会に研究成果を報告するために、学生はデータ処理と考察を行っている。

一連の経過から明らかのように、はじめは教員による社会貢献だったものが、学生の関与が増すに伴って高大連携協定に結びつき、ついには高校の授業支援がゼミ生の学びのフィールドになった事例である。はじめは緊張気味でぎこちなかった学生が、次第に高校生とうちとけ生き活きと

特集・学生支援体制の現状と展望

コミュニケーションをとるようになり、著しい「成長」の姿を見せた。

蛇足ながら、この活動から担当教員は、昨年夏に本学で行われた教員免許状更新講習の題材を得て、その成果は小中高校の教員にフィードバックされた。社会貢献活動が教育・研究活動とうまく絡み合い、再び社会貢献に寄与できたと自負している。(稲木康一郎)

蚕都上田プロジェクトによる地域活性化

——企業情報学部前川プロジェクト研究の事例

企業情報学部では、企業や社会に関する課題を発見し、それを解決する能力をもつ人材を育成する教育研究を行い、学生が、幅広い識見と経営・情報・デザインの領域に関する総合的な知見とを身につけ、新たな視点にたつて課題解決の方向性を発信することができる力を培うことを学位授与の方針としている。

蚕都上田プロジェクトは、長野大学が中心となり、かつて「蚕都」と呼ばれ蚕糸業で栄えた上田の歴史・文化を捉え直し、今も残る蚕都の文化的・人的資源を活かして「世界にアピールできる上田のこれからのまちづくり・人づくり」を推進する地域活性化プロジェクトである。平成二一

年度には、シンポジウム、蚕都上田展と巡回ツアー、まちあるき等を通して、地域の歴史的・文化的資源の掘り起こしを行った。平成二二年度は、上田市有形文化財「旧上田市立図書館」を、市民と地域の交流発信サロン兼インターネット放送局「蚕都上田館」として再生させた。二年連続で長野県の「地域発元気づくり支援金」事業に採択されており、制作番組は地元ケーブルテレビ局でも毎週放送され、地域に密着した情報発信を行っている。

学部教育の柱であり二年次からの必修科目である「(前川)プロジェクト研究」では、この蚕都上田プロジェクト

に参画しその一翼を担うことにより、学生と地域の人々との交流、地域を教育フィールドとして、課題発見・問題解決能力を育む、実践的な学びの場としている。

一年次後期の「課題発見ゼミナールⅡ」では、学生はプロジェクト研究に踏み出すための入門的なプロジェクト学習をする。ここでは蚕都上田プロジェ



クトが主催する地域活動に参加し、自らが取材者となって地域社会や地域の人々との接触を始める。そこから、地域の課題を探り、二年次以降の研究テーマの深化・発展につなげていく。

二年次以降は、プロジェクト研究で実施する共通テーマ「蚕都上田放送局プロジェクト」の中で、自分が何を探求したいか、何をすることが能力を活かせるかなどを考えて役割分担をし、自らの研究テーマの追求をしていく。今年度からは活動拠点が「蚕都上田館」になったことにより、大学のゼミ室から市街地のど真ん中へと活動フィールドの中心軸が変わった。発想も以前よりユニークさが増し、行動もよりアクティブになった。

学生たちのテーマはそれぞれに異なり多様で担当教員から見ると面白いものばかりである。ある学生は、あまり読まない紙のマニュアルをやめることを提案し「動画マニュアル」を自ら制作し、他者評価を受けながら改良している。また、ある学生チームは、B級グルメ路線で新商品「蚕都バーガー」を提案した。街中のパン屋さんなどの協力者が現れ、現在試作中である。また、そのプロセスも記録して番組にする計画である。

思い切りチャレンジすることが自分自身をより大きく成

長させる力となる。地域から学生たちに向けられる期待を、飛躍の大きなバネに変えられるのも若さの特権だろう。
(前川道博)

伝統野菜の保存と普及に取組む地域づくりゼミ

——環境ツーリズム学部古田ゼミナールの事例

環境ツーリズム学部は、地域における自然および社会の現状や課題を、体験や観察を通じて発見し、調査技法を活用して分析し、改善策を提案できる力を培う実践的、応用的な学部である。したがって、学生自らが、自然と文化に関する豊かな教養、よりよい地域社会を創るマネジメント能力、環境と調和する観光に関する専門的な知識および技能を修得することを学位授与の方針としている。

本学部の特徴は、四年間を通じて必修科目として置かれているゼミナールなどの少人数教育である。そのうち、たとえば古田ゼミでは、「地域の食資源を活用した元気な地域づくり」をテーマとし、伝統野菜「山口大根」の保存と活用の研究に取り組んでいる。

一年次の「課題探求ゼミナール」および必修科目「コミュニティ体験」では、上級生の支援を受けながら、上田市産業展や地域での伝統野菜普及活動に参加し、農業、商工



業、観光業などとの接触を通じて生きた地域課題を自らの研究テーマとして発見する。一年次の終わりに、地域課題を解決するために二年次以降に自分が挑戦したいプロジェクトの構想をまとめる。二年次の「入門ゼミナール」では、ワークショップ等を行いながら自分たちのプロジェクトの企画書を作成し、必要な場合は、本学独自の「夢チャレンジ基金」やその他の助成金にも応募して資金も自力で調達する。地域の諸団体と連携しながら、プロジェクトを実現していくことを通して、将来必要な実践力を身につけていく。

担当教員は、学生のそれぞれの夢の実現の援助や、文献、情報などを使いこなす技法修得の支援を行う。伝統野菜「山口大根」の形の悪いものを活用した「ドレッシングの開発」発、伝統野菜の流通に関する社会実験、食べ方や保存方法に関する在野の知恵を集めるための「地大根料理コンテスト」の実施とレシピ集の発行、地大根の若い世代への周知と商工振興を目的とする「地大根キャラクター・コンテスト」など、ゼミ

生たちの創意工夫が湧きだしてくる。

これらのプロジェクトを実施することによって、ゼミ生たちの探求心はさらに高まり、三、四年次の「専門ゼミナール」では、開発したドレッシングの中心市街地での販売実験の実施、温泉街での名物大根づくりの実験などへと発展する。それらの実験結果や調査結果は、地域住民を聴衆とする「ゼミナール大会」や「千曲川流域学会」等の地域学会、観光系の学会等で報告され、地域の人々の真剣なまなざしの中で鍛え直され、最終的に卒業論文へと結実する。

地域をフィールドとする四年間の少人数教育のメリットは、「地域の教育力」を存分に活用させていただくとともに、ゼミ生自らが主体的に学びに参加することによって、座学だけでは得られない確実な達成感を得られることにある。また、実践的で総合的な能力の形成は、複雑で変化しつつある地域社会をキャンパスの延長として学ぶことによつてある程度可能になると考えられる。さらに、こうした経験を通して自らが学んだ成果は就職活動にも積極的に生かすことができ、自分なりの世界観や市民的判断力をもつた主体の形成や、自らの人生を切り開き地域社会の牽引役となり得る人材の育成に繋がるのではないかと考えている。

(古田睦美)